

3 弥生時代北関東の集落立地とその様相

—群馬県域を中心として—

柿沼恵介(新田郡新田町立木崎小学校)

(1) はじめに

鶴が東南東方向に首を伸ばしてはばたく姿に例えられている群馬県は、その大半を占める両翼から尾にかけての地域が山岳部となっており、ほぼ中央を縦に割く形で利根川が南流している。残りの狭隘な鶴首部分は関東平野の最奥部として平坦地が広がっており、利根川は、埼玉県との県境付近を東南東方向に流下する。

弥生時代の各遺跡は、合流点を中心とする大小各河川域を選地しており、全体的に西濃東薄である。しかし、時期・遺跡の性格によって選地の主要因を自然的条件としたり、社会的条件としたり、両者を採用したりする等相違をみせており、遺跡密度の濃淡が地形・地理的に変動している。自然的条件を主要因とするものには、主対象となる生産物の違いによっても選地域が異なってくる等の様相がみられる。

(2) 前期末～中期前半

弥生文化が数次に亘って波及してくる弥生時代前期末から中期前半にかけては、自然的条件を選地の主要因としているが、二者が看取できる。1つは、標高200mを越える山間部の丘陵・台地縁辺・河岸段丘上を選んでおり、1つは、標高60m前後の自然堤防状の微高地に立地している。現時点での遺跡数は、前者が圧倒的に多く、鳥居峠や碓氷峠・和美峠・内山峠等のルートを通して西から波及してきた弥生文化が、中心的に採用されたことを物語っている。遺跡の内容としては、岩陰遺跡や土壌が大半で、住居を営んだ例としては、調査例で2遺跡、開墾時に伴う焼土等の存在から推定できるものが1遺跡である。調査した2遺跡は、鍋川右岸の上位段丘上にのる**神保植松遺跡**(吉井町)と碓氷川上位段丘面南端の独立的景観を呈する丘陵上に占地する**注連引原Ⅱ遺跡**(安中市)とである。

中でも、中央部付近に地床炉を持つ不整隅丸方形の竪穴住居跡1軒を検出した注連引原Ⅱ遺跡は、住居が土壌群と離れた位置に占地しており、岩櫃山式期の集落造営観の一端を示している。

後者の遺跡数は現状では少ないが、沖積地の調査が深い部分にまで及ぶにつれ、増加することが予測できる。内容の判明している遺跡としては、**沖Ⅱ遺跡**(藤岡市)の土壌墓群等である。明確な住居検出例はないが、焼土の存在や遺物の出土範囲等から**長楽寺遺跡**・**阿久津宮内遺跡**(尾島町)でその存在が推測できる。住居形態が、明確な竪穴であったかどうかを含め、主とする生産対象に規制される集落の選地条件や出土土器の様相に前者の遺跡とは相違が指摘でき、複線の波及経路の追求とも絡めて課題となるところである。

(3) 中期後半～後期初頭

中期中葉には一時的な過疎現象が到来するが、後半に至って、波及期段階では集落造営の選地対象となっていなかった地域に遺跡が激増してくる。地形的には、山麓縁辺の河岸段丘や自然堤防状の微高地・低台地であり、位置的には、榛名山東麓から南麓にかけての地域(前橋台地及びその周辺)や鍋川流域、利根川上流域、**あがつま**吾妻川流域、烏川上流域に増加が目立つ。また、赤城山山麓では、丘陵性の台地も選地対象としている。

これら該期の出土土器をみると、甕・壺・甗・鉢・高坏・小型甕・小型壺・小型台付甕・注口土器等があり、弥生土器の組成・器制が確立している。また、鋤・鍬等の各種農具や弓等の狩猟具、斧柄等の工具、容器類を含む生活用具、建築材等の木製品、加工材の出土も、農耕を基本とした弥生文化の安定した内容を示している。立地地域とも考え併せた時、主体的には、広狭の違いはあるにせよ水田適地をめざしており、畠作を折り混ぜながらも稲作志向が強く、それに合った自然的条件を重視した選地形態を採っていると指摘でき、

そこに波及期との違いをみる。

反面、水田適地を周辺に持たない場所を選地する遺跡もあり、水田・畠という異なる農耕形態への比重のかけ方の違いから生じた選地という解釈だけでは説明できない要素も認める。後述する環濠集落・焼失集落(住居)の成因の1つと考える社会的条件も含めた選地を考慮する必要がある。

ここで、該期の土器及び集落の様相をみていくと、土器においては、二つの地域圏が明確である。1つは前橋台地を中心に西側の山間部へと展開する地域圏であり、1つは赤城山を中心として、その南麓及び北麓の薄根川・片品川流域、伊勢崎市・太田市周辺の平野部へと連なる縦方向に延びる地域圏である。前者は、中部高地の栗林式土器と祖源を同じくする竜見町式土器であり、後者は、荒口前原系土器群である。後者の様相は一律性に欠けており、竜見町式土器を基調としながらも、南東北の二ツ釜式土器や川原町口式土器・北陸の山草荷式土器、南関東の宮ノ台式土器、在地派生土器等が絡んでおり、西方・東北方・東南方の該期弥生土器文化からの影響を受け入れている。自立的性格に乏しいことが、1つの独自性ともなっている複合土器文化である。

次に、集落の様相であるが、特記事項として、環濠集落の明確な存在、第一期焼失集落の出現が挙げられる。環濠集落は、図-1からも明らかなように、いずれも竜見町式土器文化圏にみられ、小塚遺跡(富岡市、図1-7・図2)、清里庚申塚遺跡(前橋市、図1-2)、浜尻B遺跡(高崎市、図1-5)・高崎城三ノ丸遺跡⁽¹⁾(高崎市、図1-6)・^{かみなみえみなみ}上並榎南遺跡(高崎市、図1-4)、中村遺跡(渋川市、図1-1)で検出されている。時期的には、少なくとも2期に細別できる可能性を有する。焼失集落は、小塚遺跡と荒口前原系土器文化圏である西迎B遺跡(柏川村、図1-3)で確認されている。

まず、環濠・焼失集落である小塚遺跡例をみると、鎭川の支流である高田川左岸の自然堤防状の微高地に、中期後半に入って新たに営まれた集落で、倒卵形と推定される環濠の内側で7軒の堅穴住居と1基の堅穴・11基の土塼が検出された。全掘でないため集落規模等は不明であるが、確認された住居はすべて焼失している。環濠は東側に、開口したままの通路状の張り出しを有しており、断面の基本形は、中位に段を持つ薬研堀状を呈する。他遺跡では、V字状の断面が主流をなす。本集落は、焼失後再開されず、短期間で幕を閉じている。

次に、焼失集落である西迎B遺跡の概要であるが、本集落は独立丘陵状をなす洪積台地の南端に位置しており、隣接する谷地との比高は、深いところで5m程である。調査された該期の遺構は、11.68×7.40mの大型住居1軒及び現状で9×5.8mの比較的大型の住居をそれぞれ核とする堅穴住居15軒であり、内5軒は焼失住居の可能性が高い。小規模集落の多い荒口前原系土器文化圏の拠点集落であり、土器の様相より2期に細分可能である。本集落も焼失後、その機能が消滅し、再び集落が形成されるのは古墳時代に入ってからである。この他に、中期後半から後期まではほぼ連綿と集落を営んだ^{しんぼ}新保遺跡(高崎市)も2条の自然小河川に囲まれた区域を居住地としており、環濠集落的な意識を持っていたと推測できる。

以上記してきた環濠・焼失集落の成因であるが、環濠集落は、村落の区画を示すと共に、その共同体組織の対外的防御施設ともなり得ることは明らかである。該期における事例は、本県だけにとどまらず、ほぼ同時期と推定できる南関東の宮ノ台式期の大塚遺跡や中部高地の栗林Ⅱ式期を主体とする松原遺跡等でも検出されている。焼失集落についても宮ノ台式期の朝光寺原遺跡や高台に立地する三殿台遺跡に例をみる。

その成因としては、

A：不注意や落雷等の自然災害に主因をもつ火災の類焼・延焼による一次的焼失で、生活用具は殆ど持ち出せないケースが多い。

B：土石流等の自然災害による廃棄は別にして、環境の変化等による廃棄に伴う、習俗としての住居へ

Ⅶ 特 論

の放火による二次的焼失。この場合、生活用具は当然持ち出すことができる。

C：集落間、或いはそれを越えた文化圏、さらに広い政治圏での戦闘の過程、またはその結果招来された集落への放火による一次的焼失。このケースでは、不意打ちのような予測できない戦闘の場合は、生活用具は持ち出せないが、中長期的に不安定な社会情勢が続いていれば、ある程度は生活用具を持ち出し得る。

D：呪術等宗教的要因や疾病等に伴う二次的焼失等で、生活用具は、場合によっては持ち出せない。

の4ケースを想定することができる。これら4観点から該期の焼失集落を検討した時、Aは、他県の焼失事例の存在や同時に出現した環濠集落の実例等から、他県でも偶々同じように焼失ケースが多かった、或いは環濠集落が存在していた等偶然性の重なりによって依拠した説明に終始せざるをえない。Bは、該期集落の中で焼失例を持たないケースも多く、一文化圏の中で習俗として定着していないことになる。

Cは、弥生文化人の羨望である広大な稲作適地をもつ前橋台地及びその周辺に環濠集落が主に分布していること、各集落はその地域における拠点集落と考えられること、環濠集落と焼失集落が同時期に出現していること、他県にも同様な事例を認めること等より蓋然性が高く、自立性に乏しい土器文化圏の存在や既に指摘されている時代の潮流も傍証となる。Dについては、データ不足が否めない。

これらのことから、群馬県における中期後半、特に後葉から後期初頭にかけの弥生集落について下記のことを考える。

- ① 農耕作業や集落造営等に伴う村落共同体組織の階層分化と協同化が成立していた。
- ② 拠点集落を核に、集落間の紐帯組織が成立していた。
- ③ 土器文化圏同士を比べた時、集落構成の充実度・被災率の違いは、社会的成熟度の違いにその原因がとめられる。本県の場合、十分に評価できる成熟状態には到っておらず、環濠・焼失集落の出現も、余波的な戦闘への対応・結果という規模で終始した。

(4) 後期後半～古墳時代初頭

中高瀬観音山遺跡の所属時期を対象としている。

A 土器編年と地域圏

後期後半の集落に視点をあてると、中期後半後葉の集落同様、山麓縁辺の河岸段丘や自然堤防状の微高地・低台地・丘陵性の台地を選地しているが、集落規模の拡大に伴う新しい集落の展開、つまり、遺跡の増加により一層顕著となる。これは、農業技術の進歩に伴う生産力の向上・安定が、新たな農耕適地の需要へとつながり、可耕地への分散移動となってもたらされたものと推測できる。

そのことは、前橋台地上の御布呂遺跡・同道遺跡・熊野堂遺跡・融通寺遺跡・小八木遺跡・日高遺跡(図4-29)・新保遺跡(図4-31)・並榎北遺跡・東町Ⅲ遺跡等、25遺跡以上を数えるC軽石下水田の検出例や貯蔵用の大型壺の増加等によっても傍証できる。また、この他にも、二之宮千足遺跡(前橋市)や関後遺跡(柏川村)・甘楽条里遺跡(甘楽町)のC軽石下、あるいは、砂礫土下の水田や有馬遺跡(図4-25)・有馬条里遺跡(図4-24)・中村遺跡(渋川市)、荒砥天之宮遺跡・上ノ坊遺跡(前橋市)、熊野堂遺跡の畠跡の確認など、農耕形態の多様化が看取できる。しかし、それだけで遺跡数の増加・新集落の出現・展開を説明するには不十分であることは当然である。そこで、ここでは、後期後半から古墳時代初頭期における群馬県出土土器の様相や集落の様相に限定して述べることにより、遺跡数の増加を説明していく。

まず、後期土器及び古墳時代初頭の土器については、後期後半期に明確となる2つの地域圏が中心となる。

1つは、竜見町式土器文化圏の継承発展形態である樽式土器文化圏として位置づけられる。この土器文化

圏は、純正度が高く、その後半期まで他の土器文化圏の要素が殆ど介入していないこと、県内では、広大な農耕適地を後背に持ち、遺跡の広がりや数から強者の存在ととらえられ、中葉には明確な小地域圏が分立してくる。かつて、筆者は、大規模開発以前の資料を軸として、本県における後期樽式土器をA類→B類・B'類という流れでとらえ、B類・B'類という小地域圏の存在及び、両B類期における古式要素と古式土師器的要素の存在から時間の広がりを予測し、時期細別の可能性(井上・柿沼,1977)を指摘した。その後、8小地域圏を設定し、榛名山東南麓地域を中心にⅣ期区分論(三宅・相京,1982)が提示された。

これは、該段階における編年論として首肯できるが、古墳時代との画期が不明である点、榛名山東南麓地域第Ⅲ期に盛行する刻列を施す折り返し口縁、または有段刻列突帯口縁壺の位置付けに欠ける点、簾状文の系統の変遷論が不詳である点等、拙論同様、資料分析結果をもとにした予察に不十分さが指摘できる。

その後、新保遺跡大溝出土の龐大な出土土器を、型式学的操作法から抽出した類型を軸に詳細に分析構築した様式論(佐藤,1988 2論文)が提示された。結論的には、後期土器を大別3期区分している。後期3期の甕の簾状文のあり方・有段刻列突帯口縁の認識等細部の把握が不明瞭であるが、地域的跛行性をも踏まえており、現時点の樽式土器編年論では最も説得性を有する。

さらに、同様な様式論の観点から樽式土器を分析し、後期弥生土器を時間的小区分でⅢ期に区分(若狭,1988,89)し、外来系器種の組成への参画を契機に樽式系土器とするⅢ段階区分論(若狭,1990)が提示された。小様式の変遷論としては、樽式系土器の各3段階に赤井戸式系土器・埼玉県児玉地域の土器群を対比しており、今後も妥当性を有すると考える。加えて、種々の要素の検討・構築を経て現象の解釈をすべきとしながら、古墳時代の地域動向について、在地文化圏内外の人的移動・初期古墳成立との因果の可能性を示唆しており、傾聴に値する。

外来系文様要素や遠隔地の土器の参入、焼失集落の出現時期への解釈を含め、種々の変容が同時的に噴出している後期3期の細分論を前提とし、そこに画期を求める考えに立つ筆者は、3期と樽式系土器Ⅰ段階との間に画期を求める論者との間に細部でのずれを認める。これは、資料がより増加していることから、今後より明確に規定されると考える。

これらを踏まえて、樽式土器の様相・出土数をみた時、後期3期及び樽式系土器Ⅰ段階の増量が目につく。継続している新保遺跡や有馬遺跡・日高遺跡等では、3期段階に集落内住居の増加が顕著である。また、^{のつ}乗附遺跡(高崎市, 図4-32)・少林山台遺跡(高崎市, 図4-33)・^{ふんこうはつき}分郷八崎遺跡(北橋村, 図4-18)、日影平遺跡(沼田市, 図4-10)・鎌倉遺跡(沼田市, 図4-1)・下川田平井遺跡(沼田市, 図4-6)、水沼遺跡(倉沢村, 図4-20)等、3期段階になって新規に集落を形成している遺跡の存在を広域、かつ多数認める。

この3期段階の土器の文様要素(次頁図-3)をみると、南東北の伊勢林前式・輪山式土器に祖源を持ち、吉ヶ谷式・十王台式・二軒屋式土器にも採用された有段刻列突帯口縁や1～3段の折り返し口縁部への縦、或いは稀に矢羽根状の刻列の存在⁽²⁾が前橋台地及びその周辺地域に顕著である。また、頸部における2～4連節の簾状文やT字文の存在、胴上部等における横走羽状充填細櫛描文の出現も指摘できる。これらの様相の一部は、天狗原遺跡(宇都宮市)等出土の二軒屋式土器にも登場している。

なお、ここでは紙数の都合上、土器編年論について詳述する余裕はないが、型式学的編年論の1つの要素として、後期及び古墳時代初頭の簾状文を抽出してその傾向をみると、単節→短間隔2連節→長間隔短2連節→多連節(3～9連節)→長間隔単節・櫛描横線文・単節状多連節→無文化という流れをたどることができ、画期は、3連節・4連節を主流とする多連節段階に置ける。実際には1つの遺構から混在して出土するケースも多いが、出土比率の検討からもこの方向に向かっている。いずれにしても、1期・2期に比較して、

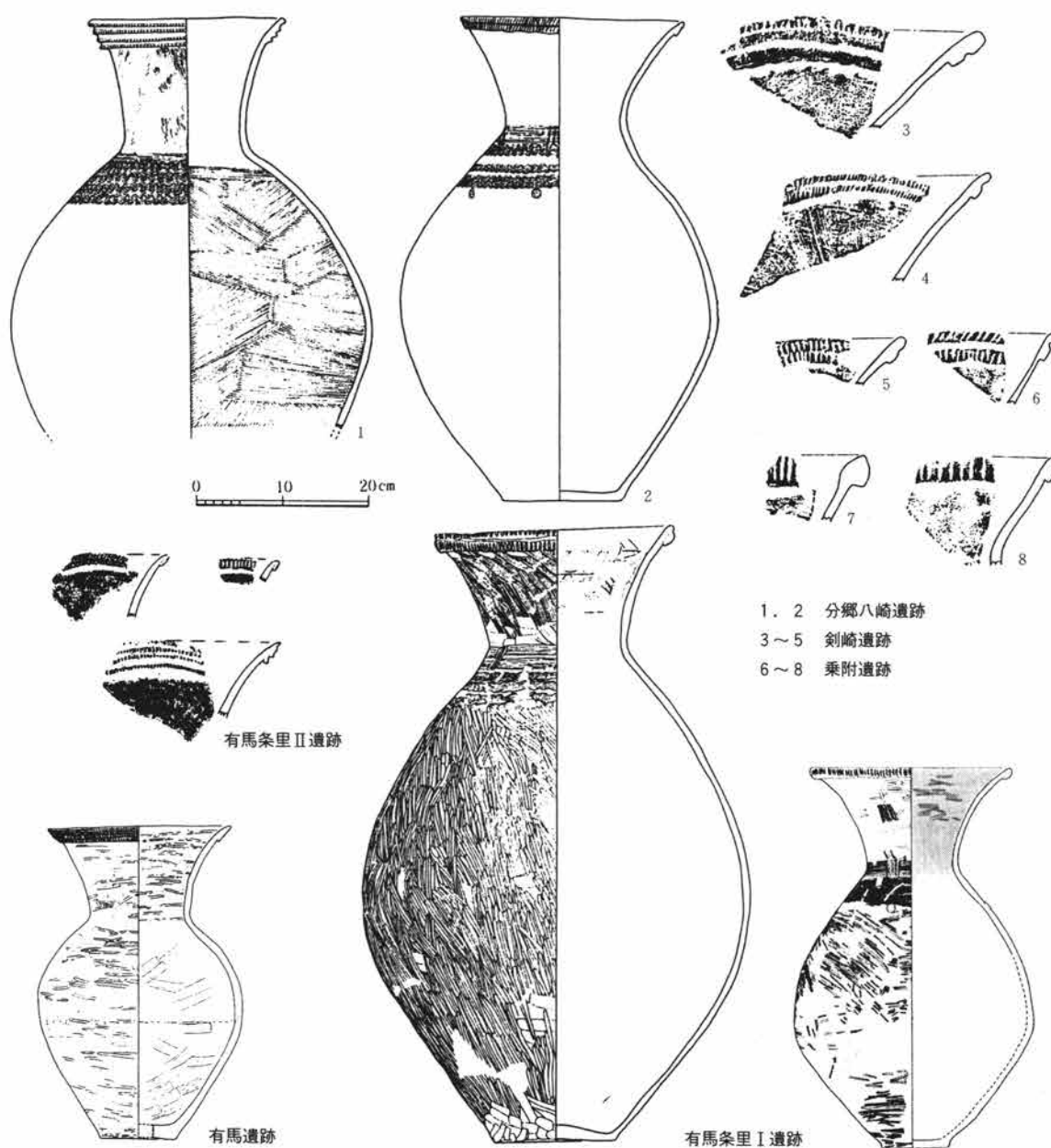


図3 刻列文弥生土器

夥しい数の住居・集落、及び多岐にわたる内容を含んだ土器が確認されており、細分の可能性がある。

樽式土器Ⅰ段階においては、折り返し口縁部刻列や胴上部における縦走充填細櫛描文・波状文区画櫛描縦線文の存在、頸部における櫛描横線文・長間隔単節・単節状多連節の描出、古墳文化期の外来系器種の参入等が指摘できる。

これを、中高瀬観音山遺跡出土土器に照らし合わせてみると、管見であるが、短2連節が主流を占めること、折り返し口縁部刻列は存在するが少数例であること、赤井戸式土器や十王台式土器・南関東系の土器等が若干混入していること、樽と赤井戸式土器の文様要素が1土器のなかに融合した形で描かれたものも存在する

こと等が指摘できる。小地域圏の存在を標榜しながら、後期3期に盛期を迎える遺跡といえる。これに対して、谷を挟んで西隣する庚申山地区出土土器は、樽式系土器の範疇で捉えることができ、集落の移動が推測できる。

もう1方の地域圏では、後期後半後葉に入って、赤城山南麓等を中心とする丘陵性台地や扇状地を含む低台地に集落が形成される。土器の様相としては、吉ヶ谷式土器と濃い類縁関係を持つ赤井戸式土器が中心となる。どちらかという、弱者の存在である。その区分については、赤井戸Ⅱ期を弥生終末とし、Ⅲ期を古墳時代初頭に位置づける編年論(小島,1982)が提唱されている。赤井戸Ⅱ期・Ⅲ期については前述した若狭氏の補完がある。

また、この時期で注目されるのは、広大な平坦地及び湿沢地を有する空閑の地としての関東平野部だけでなく、西部や北部の山間地にも現状で弥生後期とされる外来系土器が客体的存在として参入していることである。例としては、荒砥前原遺跡(前橋市、図4-36)や西太田遺跡(伊勢崎市)・花園遺跡(新田町)・常木遺跡(尾島町)・石墨遺跡(沼田市、図4-2)等出土の十王台式土器、後閑遺跡(前橋市)等出土の弥生町式土器、判形遺跡(吾妻 東村)出土の畿内第Ⅴ様式壺の系譜をひく櫛描文土器、内堀遺跡群(前橋市)や神宮寺西遺跡(渋川市、図4-23)・長根安坪遺跡(吉井町)出土の天王山式土器、町田小沢Ⅱ遺跡(沼田市、図4-4)等出土の5の字口縁を有する月影1式土器の存在⁽³⁾であり、樽式土器や赤井戸式土器と伴出しているケースが多い。

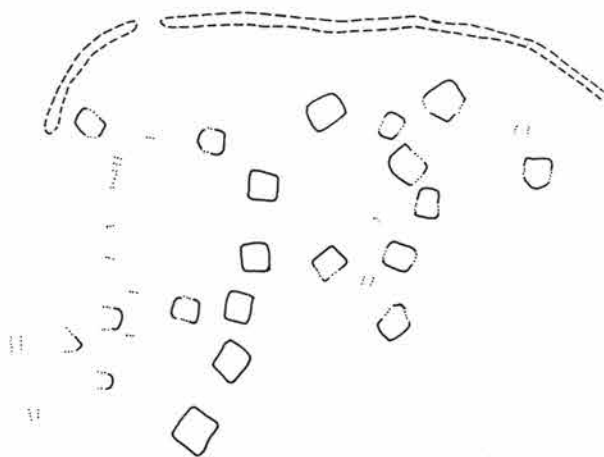
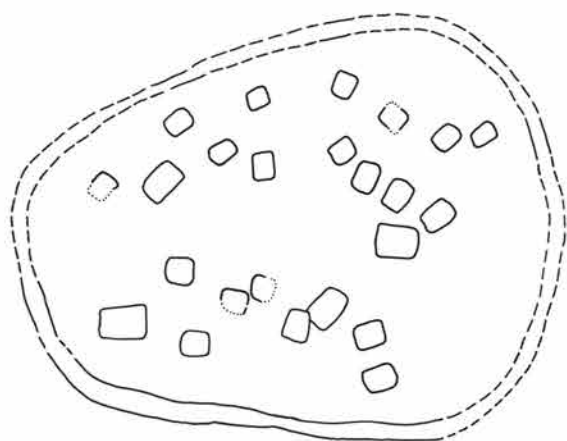
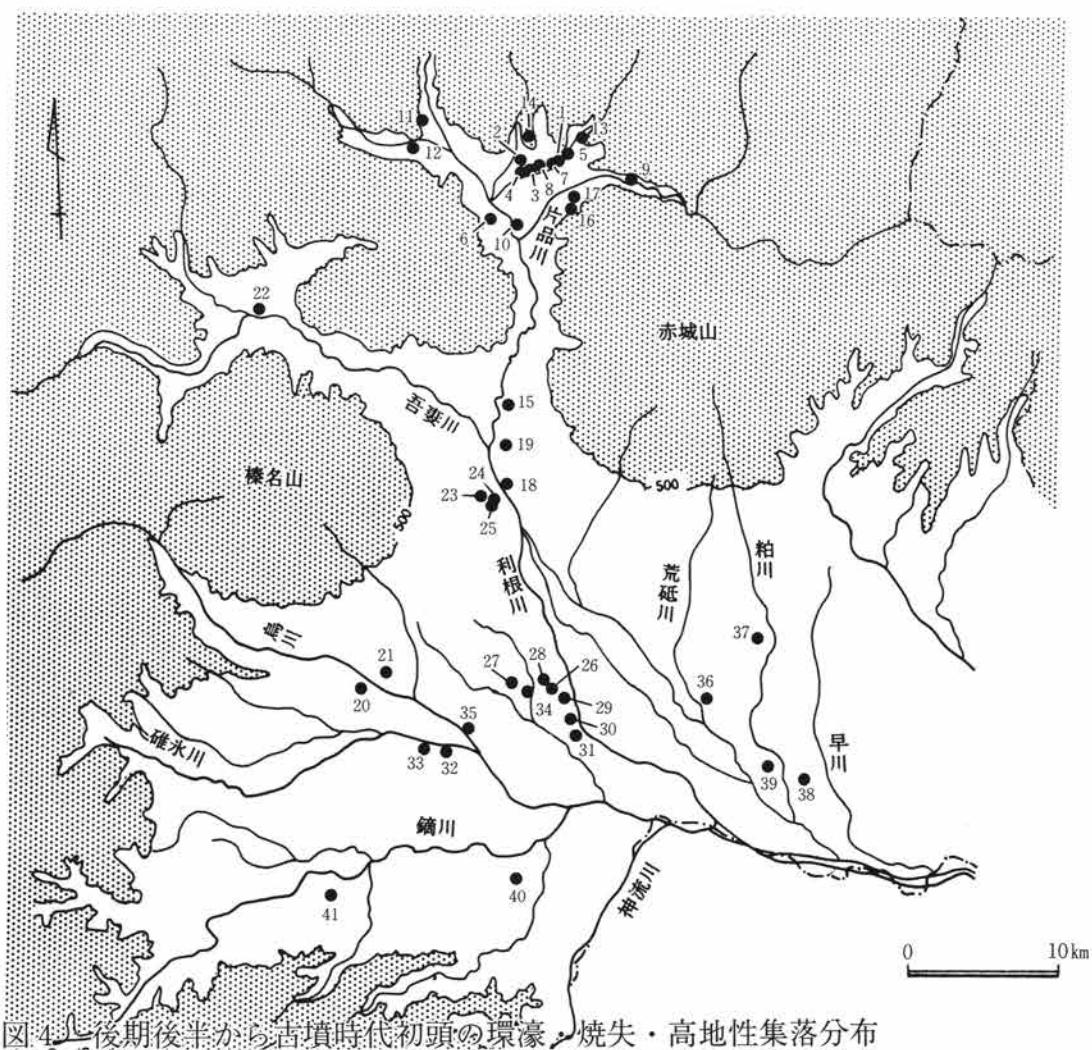
つまり、後期3期段階には、外来系文様要素が加わってくるだけでなく、弥生文化期の外来系土器が客体的存在として入ってきていることを指摘する。このことは、高い純正度を誇ってきた樽式土器文化において、その3期のある段階で、他の土器文化圏の文様要素を取り入れたり、客体的にせよ外来系土器を受け入れ、保持する事態が生じたことを物語っており、従来とは異なる交渉・接触のあり方を示唆している。しかも、同様な現象は、赤井戸式土器Ⅰ期段階にも認められる。

B 焼失集落

次に、該期の集落についてであるが、図-4(p.350)にあるように環濠集落及び、前項の中期後半後葉以上に焼失した住居や集落(第二期)の増加を認める。同時に、新たに展開した集落の増加が特筆できる。環濠集落としては、樽式土器文化圏に属する日影平遺跡(沼田市、図-5)や正観寺遺跡(高崎市)、赤井戸式土器文化圏である西原遺跡(粕川村、図-6)等が挙げられる。焼失した住居或いは集落としては、管見であるが、樽式土器文化圏を中心に抽出した表(p.355)からも明らかなように、前項の中期後半～後期初頭段階以上に増加率が顕著である。新たに展開した集落は、先にも若干触れたが、被災した遺跡数を超える数を検出しており、その中でも後期3期から古墳時代前期にかけてピークを迎えている。

まず、環濠・焼失・新規展開集落の三条件を具備する日影平遺跡例をみると、利根川左岸と片品川右岸に挟まれた標高383m前後の最高位段丘上に位置しており、片品川との比高は80mを測る。断面V字状に掘られた環濠は、全体として倒卵形を呈すると推測でき、長軸110m、短軸85m程である。出土土器の一部には折り返し口縁部に波状文を施すものや、2連節・3連節の簾状文、波状文区画縦線文等があり、後期3期に盛期を持つと考える。現状で環濠内に24軒の竪穴住居を検出しており、焼失住居の割合は約1/4である。この被災率は、正観寺遺跡や中高瀬観音山遺跡(図4-41)にも近似しているが、同時期占地住居が特定されることにより、より高まる可能性がある。本遺跡は、完掘でないため焼失時期を同定する資料に乏しいが、今後の調査では同時期占地住居の割り出しが重要視される。また、このことは、他の焼失住居・集落についても同様な検討の必要性を指摘している。

西原遺跡は、石田川と東神沢川に開析された赤城山南面の洪積台地先端部に位置しており、西の谷とは5m程の比高を有する。トレンチを主体とする調査で、2ヶ所に土橋を持つ、台形断面の環濠の半周と区画内に



赤井戸式土器・櫛描文土器・古式土師器三者の共伴する赤井戸式土器期の竪穴住居5軒を確認している。環濠の底面直上は浅間山C軽石純層で埋まっている。この他に、樽式系土器I段階の集落である見立溜井遺跡(赤城村、図4-15)では、集落から離れた位置に、覆土の様相から集落と同時期と考えられる断面V字状の溝が途絶えた形で検出されている。

次に、第二期焼失集落であるが、樽式土器文化圏だけでなく、西大室遺跡群(図4-37)をはじめとする赤井戸式土器文化圏でも被災率の高まりが顕著である。その様相を以下の3観点でみていく。

ア. 集落の継続性

継続的集落である日高遺跡や新保遺跡・有馬遺跡等でも後期3期段階での焼失住居例が存在するが、後期3期段階に新規に展開した分郷八崎遺跡・乗附遺跡・下川田平井遺跡・水沼遺跡等で焼失集落例が顕著である。さらに、樽式系土器I段階期に新たに展開した荒神前遺跡(群馬町、図4-27)や見立溜井遺跡・中棚遺跡(昭和村)、赤井戸式土器段階の西大室遺跡群でも多くの焼失例を認める。中でも、周堤状遺構を付帯する3軒の竪穴住居と1棟の平地建物がセットで検出された荒神前遺跡は、C軽石降下直前で全住居が焼失しており、見立溜井遺跡同様該期集落の好資料を提供している。

イ. 集落の規模

全貌を把握した集落が少ないため、やや根拠に乏しいが、拠点集落である新保遺跡や有馬遺跡・有馬条里遺跡・日影平遺跡をはじめ、立地からある程度の集落の広がりや予測できる遺跡で被災しているケースが多い。

ウ. 集落の立地

微高地や低台地上に立地する新保遺跡や日高遺跡・正観寺遺跡等に比して30～80mの比高を有する、用水の不便な段丘崖や台地・丘陵上に立地する遺跡で被災率が高い。中高瀬観音山遺跡や分郷八崎遺跡・乗附遺跡・少林山台遺跡・下川田平井遺跡・水沼遺跡等がこれに該当する。

これらの遺跡に平面的な視点も加えると、利根川や烏川・鎭川等の比較的大きな川に面した、眼下の見晴らしのよい尾根部に立地している。つまり、河川に沿った主要道の動向が把握しやすい位置にあるという見方もできる。この他にも、未見であるが、桃瀬川・胡桃沢川によって画された吾妻川左岸河岸段丘上を選地している中之条町の伊勢町遺跡群(図4-22)では、環濠を伴う100軒以上の後期竪穴住居が確認されており、いくつもの大型住居や焼失住居の検出と共に、群馬と長野の文化交流ルートの拠点と把握されている⁽⁴⁾。

以上のことから、第二期焼失集落は、集落の継続性の有無・集落の規模・集落の選地域に必ずしも指標となる厳密な規制条件及び一律性を認めることはできないが、現状では、後期3期から少なくとも樽式系土器I段階まで集中的かつ広範囲に存在することは確言できる。そして、焼失の成因としては、前項であげたA・B・C・D以外に、Eとして住居の構造上の欠陥による一次的焼失が検討材料となる。それは、後期3期段階の炉が壁に近づくこと、また、複数炉が存在する例が多いことを指している。

ここで近隣の動向をみると、長野県では、善光寺平南部の篠ノ井遺跡群で3連節期の環濠集落⁽⁵⁾が、また、佐久地域では終末段階とされる西一里塚遺跡・戸坂遺跡で環濠集落⁽⁶⁾が、さらに松本平南部では、上木戸遺跡で環濠集落が推測されている。他に、山梨県の平野遺跡では、25軒の終末期とされる住居が全部焼失しており、上野遺跡では終末期から古墳時代初頭の環濠と推定される溝が斜面に掘られている⁽⁷⁾。この傾向は、横山遺跡・八幡山遺跡で終末期とされる環濠集落が確認された新潟県⁽⁸⁾、大宮台地南部の木曽良遺跡・中里前原遺跡等で弥生町式期の環濠集落を、馬場北遺跡や深作東部遺跡群等で前野町式期の環濠集落を検出した埼玉県⁽⁹⁾にも広がっている。

これらのことも視野に入れて焼失の主因を求めると、Aは偶然性の重なりが、より高まったとする説明に

Ⅶ 特 論

なり、Bは習俗として広まりはみられるが、未だ定着していないことになる。Cは、焼失例が広域かつ多数県内の該期集落に認められ、それらはすぐには再開されず一旦途絶するケースが多いこと、その中でも卓越した可耕地を有し、該期の先進地であり集落としての優位性をうかがうことのできる前橋台地縁辺の拠点集落や他の集落に焼失が顕著であること、農耕適地からかなり急峻な比高を有する眺望のよい位置に立地する新規展開集落に焼失が目立つこと、日影平遺跡や正観寺遺跡のように環濠・焼失両条件もそろえる集落が存在すること、該期の土器に外来系器種や外来系文様要素の参入が広域に多数指摘でき、それ以後、土器文化圏としての独自性・純正度が低下してくること、他県でも類する例が増加していること等より妥当性のある解釈といえる。

Dは、データが不足しているが、焼失例があまりに多く可能性は低い。新しい検討要素のEは、炉が壁寄りになっても棟方向であり、従前の条件との違いは少ない。また複数炉の場合は、低くなった屋根の下に炉がくるケースもみられ、焼失の危険性は高まる。しかし、単数炉や炉が内寄りに位置することの多い古墳時代初頭の住居・集落にも焼失が目立つことから説明不足を否認ない。

C 高地性集落の出現

以上のことから、後期3期から古墳時代初頭にかけての集落の拡大・分散は、可耕地を求めての自然的条件を主因とする展開だけでなく、防御という社会的条件を採用した展開も数多く存在したと指摘できる。その結果、高地性集落の範疇でとらえうる比高を有する眺望のよい地に、分郷八崎遺跡をはじめ各遺跡が出現したと考える。

その内容は、環濠集落・焼失集落・高地性集落の出現頻度の高まり及びその広域性や遠隔土器文化の参入に伴う自立性減少の共通性等より明らかなように、集落・土器文化圏を超えた広域現象であり、政治的動因による直接的軍事行動に対応するものであったと考える。その行動の当面の対象は、西側からの進入ルート沿いの拠点集落であり、優位性を誇る地域であったと推測でき、漸次東の地域にも及んだと解釈できる。その結果的な一現象として、有馬遺跡・有馬条里遺跡を見下ろす位置に展開する分郷八崎遺跡例のように、広い台地に選地する3期段階の中規模以上の集落が焼失し、西隣する小台地に5軒から成る小規模集落を新たに造営して、その後高地性集落としての役割の消失により集落の機能の停止期を迎え撤退に至る遺跡が出現したとする、穿った見方も可能となる。

同様に、少林山台遺跡・八幡遺跡(高崎市)・有馬遺跡・有馬条里遺跡・中村遺跡・^{からさわ}空沢遺跡(渋川市)等の前橋台地周辺の遺跡に、直後に登場した礫床墓という葬制の新たな採用にみる小地域圏の表出、さらに礫床に類似した形態・遺物を持ちながら礫床を伴っていない石墨遺跡(沼田市)等、北毛地域との濃い類縁関係の存在、及び鐮川流域等における異系統土器が伴出・混在する異相土器文化の出現等、派生的でしかも跋行性を有する小地域圏現象も内包する様相として指摘できる。

これらとは別に、遺跡相の中で特筆できるのは、焼失を体験した高地性集落である中高瀬観音山遺跡(富岡市)である。該遺跡は、大型住居を核とする集落構成だけでなく、焼土坑や掘立建物・柵等との相関関係を検討することで構造的な集落理解が可能であると共に、同一丘陵上にのる周辺諸遺跡との関係を描出することで地縁共同体の様相をも提示できる内容を具有している。

以上の現象を招来した軍事的行動は、茂木雅博氏の「茨城には高地性集落はない。」という言¹⁰⁾、及び佐真真氏の「茨城以北には弥生の防御村はない。」という話¹¹⁾が確実であるならば、該期段階は「毛」地域で収束したということになる。いずれにしても、弥生時代の終焉と新たな時代の到来に対応した後期後半から古墳時代初頭にかけての集落立地は、前述のとおり種々の様相を提示しているが、社会的成因の比重の高まりが明らかである。

(5) おわりに

本県における弥生時代集落の立地は、農耕の形態・規模によって選地を異にするが、基本的には自然的条件の採用をベースにしている。その中でも、大きな時代の流れと共に、自然的条件を選地主要因とする波及期段階、社会的条件も若干加味されてくる中期後半から後期初頭段階、さらに社会的条件重視の出現率が高まる後期後半から古墳時代初頭段階と、大きく3段階の画期をみることができた。

その中で、三つめの画期において大胆な仮説として出てくる、＜軍事体制として従来に比べると必然的に整備・統制された組織の構築が、大きな動員力と共に武具の製作等諸技術の開発・発展を促し、充実した防御施設の設営と大規模工事の実施に挑むことを可能にし、戦闘の収束によって整備された組織及び発展した諸技術が、平和への転用となって、用排水の管理に活用されたり、土木用具製作に活用されたりするなどして、不毛の平野部への展開を可能にした＞、という大課題の検証が重要となる。

また、細部においては、個々の地域に応じた農耕経営のあり方の検討とその集積からくる類型化や既存集落と新開集落の相関関係の把握に向けた検討、集落の選地・展開形態の類型化の検討、それらに立脚した社会情勢の分析、さらには戦闘状況等を傍証する資料の検討や後背補給地の追求とも絡めた軍事的行動→入植という時間的位置づけの検証等多くの追究すべき課題が残されている。以上、細かなデータの検索、論証ぬきで覚え書き的内容に終始した本稿であるが、これを起点として、今後精密な検証を軸に構築を図っていきたい。

なお、擧筆するにあたり、遅筆にもかかわらず、快く種々の資料提示・便宜をはかっていただいた群馬県埋蔵文化財事業団の坂井隆氏、多くのご教示をいただいた井上唯雄氏に心より深謝する次第である。

【註】

- 1 環濠区画内のほぼ中央に四隅土橋の方形周溝墓1基のみを検出している。高崎城築造に伴い、弥生期の遺構が破壊され、検出が難しいということもあるが、夥しい数のピットが検出されている。推測原地形から、烏川左岸段丘上という切り立った「ハナ」的地形の上を選地していることから、堅穴住居以外の別の建物・遺構の存在及び日常的な生活跡でなく、特別の目的をもって設けられたエリアであるか、等について今後検討の余地を残している。
 - 2 1段の折り返し口縁を横描沈線で区画し、2～3段に模したものの存在する。
 - 3 小池雅典氏のご教示によると、焼失住居から出土した多量の遺物の一つのことである。氏のご好意で管見したところ、後期3期段階の主に2連節・3連節まれに平行横線文を施す甕や2連節下波状文区画縦線文を有する壺、小型甕・小型台付甕・蓋・甑・高坏・鉢・片口・紡錘車・加工木製品などが伴出している。
 - 4 大木紳一郎.1993「平成4年度県下の弥生時代調査研究動向」『埋文群馬』20
 - 5 千野浩.1992「善光寺平南部（長野市域）における弥生集落研究の現状」『中部高地における弥生集落研究の現状』長野県考古学会
 - 6 小山岳夫.1992「佐久地方弥生集落の変遷」『中部高地における弥生集落研究の現状』長野県考古学会
 - 7 中山誠二.1992「山梨県の弥生集落の変遷」『中部高地における弥生集落研究の現状』長野県考古学会
 - 8 品田高志.1992「新潟県の弥生集落」『中部高地における弥生集落研究の現状』長野県考古学会
 - 9 井上尚明.1988「関東埼玉」『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会
 - 10 平成6年5月29日亀城プラザ文化ホールで行なわれた下記講演会の時の講師紹介時の言葉
 - 11 佐原眞講演会「貝塚のムラと米づくりのムラ」の中での話 平成6年5月29日 亀城プラザ文化ホール
- ※図-2,3,5,6は報告書所載のものを転載加筆

引用・参考文献

群埋文：(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- 相京建史他.1992『新保田中村前遺跡Ⅱ』群埋文
 相澤貞順・中村富夫.1973「群馬県北橋村分郷八崎弥生住居跡」『考古学雑誌』59-1
 新井仁編.1993『内匠上之宿遺跡』群埋文
 飯島克巳・若狭徹.1988「樽式土器編年の再構成」『信濃』40-9
 飯塚誠編.1993『少林山台遺跡』群埋文
 五十嵐信他.1986『中村遺跡』渋川市教育委員会
 .1980『正観寺遺跡群(Ⅱ)』高崎市教育委員会
 .1981『正観寺遺跡群(Ⅲ)』高崎市教育委員会
 五十嵐信・久保泰博.1986「正観寺遺跡」『群馬県史資料編2 原始古代2』群馬県
 石坂茂編.1983『同道遺跡』群埋文
 石野博信.1985「古代火災住居の課題」『末永先生米寿記念献呈論文集』末永先生米寿記念献呈論文刊行会
 井上唯雄・柿沼恵介.1977「弥生土器・関東北部」『考古学ジャーナル』143
 .1978「弥生土器・関東北部」『考古学ジャーナル』145

Ⅶ 特 論

- 伊藤肇編.1992『南蛇井増光寺遺跡Ⅰ』群埋文
井上太.1987『小塚・六反田・久保田遺跡発掘調査報告書』富岡市教育委員会
.1992『鞆戸原Ⅰ・鞆戸原Ⅱ・西平原』富岡市教育委員会
内田憲治他.1985『峯岸遺跡』新里村教育委員会
大江正行・平野進一他.1982『日高遺跡』群埋文
大江正行編.1989『師遺跡・鎌倉遺跡』群埋文
大賀健他.1983『井出村東遺跡』群馬町井出村東遺跡調査会
大西雅広他.1985『上並榎南遺跡』群埋文
大木紳一郎他.1984『城平遺跡・諏訪遺跡』群埋文
.1992『中部高地における弥生集落研究の現状』長野県考古学会
岡本範之他.1993『戸神諏訪遺跡Ⅲ』沼田市教育委員会・群馬県企業局
尾崎喜左雄他.1975『水沼遺跡』倉渕村誌別冊
小野和之他.1979『小八木遺跡調査報告書(Ⅰ)』高崎市教育委員会
柿沼恵介.1986a『荒口前原遺跡』『群馬県史資料編2 原始古代2』群馬県
.1986b『倉渕東小校庭遺跡』『群馬県史資料編2 原始古代2』群馬県
.1986c『乗附遺跡』『群馬県史資料編2 原始古代2』群馬県
柿沼恵介他.1986『分郷八崎遺跡』北橘村教育委員会
柿沼恵介.1990『弥生文化の伝播と展開』『群馬県史通史編 原始古代1』群馬県
柿沼幹夫.1988『埼玉県北西部地方の櫛描文土器』『埼玉考古』23
加部二夫他.1989『内堀遺跡群Ⅱ』前橋市埋蔵文化財発掘調査事業団
神部聖語他.1979『引間遺跡』高崎市教育委員会
.1989『八幡遺跡』高崎市教育委員会
木村収編.1992『内匠諏訪前遺跡・内匠日影周地遺跡』群埋文
小池雅典.1988『日影平遺跡』『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会
.1990『奈良地区遺跡群(奈良田向遺跡)』沼田市教育委員会
小島純一.1982『赤井戸式土器について』『弥生終末期の土器』群馬県考古学談話会
.1983『赤井戸式土器について』『人間・遺跡・遺物—わが考古学論集—』
.1985『深津地区遺跡群』粕川村教育委員会
.1988『堤頭遺跡』粕川村教育委員会
.1990『西迎遺跡』粕川村教育委員会
小林良光編.1988『神宮寺西遺跡』渋川市教育委員会
.1989『市内遺跡Ⅱ』渋川市教育委員会
坂井隆他.1984『熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨壺遺跡』群埋文
坂口一.1989『有馬条里遺跡Ⅰ』群埋文
櫻井孝他.1981『浜尻遺跡』高崎市教育委員会
佐藤明人.1988『櫛式土器の様式推移と地域色』『群馬の考古学』群埋文
編.1986『新保遺跡Ⅰ』群埋文
他.1988『新保遺跡Ⅱ』群埋文
編.1990『有馬遺跡Ⅱ』群埋文
.1990『弥生時代の生活環境』『群馬県史通史編 原始古代1』群馬県
篠原幹夫他.1985『西島遺跡群(Ⅱ)』高崎市教育委員会
下城正他.1985『藪田遺跡』群埋文
大工原豊編.1988『注連引原Ⅱ遺跡』安中市教育委員会
高野学他.1979『正観寺遺跡群(Ⅰ)』高崎市教育委員会
都丸肇他.1985『見立溜井遺跡・見立大久保遺跡』赤城村教育委員会
編.1990『町田小沢遺跡』沼田市埋蔵文化財発掘調査団
富澤敏弘他.1985『中棚遺跡』昭和村教育委員会
中村茂編.1994『高崎城三ノ丸遺跡』高崎市教育委員会
塙静夫.1976『天狗原遺跡』『栃木県史資料編 考古一』栃木県
平岡和夫他.1990『古立東山遺跡・古立中村遺跡・八木連狸沢遺跡・八木連荒畑遺跡』山武考古学研究所
平野進一他.1979『日高遺跡(Ⅰ)』高崎市教育委員会
.1982『日高遺跡』群埋文
.1990『日高遺跡の弥生水田』『群馬県史通史編 原始古代1』群馬県
藤巻幸男編.1985『荒砥前原遺跡・赤石城址』群埋文
馬目順一.1976『伊勢林前遺跡B地区』福島県いわき市教育委員会
水田稔他.1985『石墨遺跡』沼田市教育委員会
水田稔・石塚正則・巾隆之他.1989『門前橋詰遺跡・舩海戸遺跡・高野原遺跡』群埋文
三宅敦気・相建建史.1982『櫛式土器の分類—榛名山東南麓を中心として—』『弥生終末期の土器』群馬県考古学談話会
宮下昌文.1989『上久屋橋場遺跡』沼田市埋蔵文化財発掘調査団
村田喜久夫.1982『西太田遺跡』伊勢崎市・伊勢崎市教育委員会
山口逸弘他.1985『糸井宮前遺跡Ⅰ』群埋文
若狭徹.1988『保渡田荒神前遺跡・保渡田皿掛遺跡』群馬町教育委員会
.1989『井野川流域を中心とした弥生時代後期遺跡群の動態』『群馬文化』220
.1990『群馬県における弥生土器の崩壊過程』『群馬考古学手帳』1

表 後期後半～古墳時代初頭の焼失住居・集落(樽式土器文化圏中心)一覧

番号は図4に対応

No	遺跡名	所在地	立地	主体時期・軒数	焼失住居/検出軒数
1	鎌倉	沼田	薄根川左岸上位段丘上	後期3期	3/9
2	石墨	沼田	薄根川右岸最上位段丘	後期3期古墳初頭	5/10
3	町田小沢	沼田	小沢川右岸段丘比高6m	樽式系1	3/3
4	町田小沢Ⅱ	沼田	小沢川右岸段丘比高6m	後期3期	1
5	奈良田向	沼田	発知川左岸比高30m	後期3期	1/3
6	下川田平井	沼田	利根川右岸舌状台地	後期3期	6/15
7	戸神諏訪	沼田	発知川右岸台地	樽式系1	5
8	戸神諏訪Ⅲ	沼田	発知川右岸台地比高23m	樽式系1	5
9	上久屋橋場	沼田	片品川右岸第一段丘	後期3期	1/2
10	日影平	沼田	片品川右岸利根川左岸最高位段丘	後期3期	約2～3割
11	藪田	月夜野	利根川右岸上位河岸段丘	後期3期	1
12	大原	月夜野	赤谷川中位段丘	後期3期	1
13	高野原	川場	田沢川右岸	樽式系1	1/3
14	門前橋詰	川場	桜川右岸	後期3期	2/2
15	見立溜井	赤城	滝川右岸台地比高30m	樽式系1	6/10
16	糸井宮前	昭和	片品川左岸下位段丘	赤井戸式系	4/13
17	中棚	昭和	片品川左岸最高位段丘	樽式系1	3/5
18	分郷八崎	北橋	利根川左岸上位河岸段丘	後期3期	7以上
19	関越道分郷八崎	北橋	利根川左岸上位河岸段丘	樽式系1	3/5
20	水沼	倉測	烏川右岸河岸段丘	後期3期	1以上
21	倉測東小校庭	倉測	烏川左岸低位河岸段丘	樽式系1	1/2
22	伊勢町遺跡群	中之条		樽	
23	神宮寺西	渋川	午王川左岸微高台地	後期3期?	3/4
24	有馬条里	渋川	榛名山東南麓末端扇状地	後期3期(2期)	6/45
25	有馬	渋川	滝沢川と午王川間台地	後期3期	3/41
26	井出村東	群馬	井野川左岸自然堤防	後期2期	4/5
27	荒神前	群馬	東谷津川・大清水川間の台地	樽式系1	5/5
28	正観寺	高崎	榛名山麓傾斜地末端微高地	後期3期(2期)	約2～3割
29	日高	高崎	榛名山東南麓扇状地形裾低台地	後期3期	多と表記あり
30	新保田中村前	高崎	染谷川左岸自然堤防状微高地	後期3期	2
31	新保	高崎	染谷川左岸自然堤防状微高地	後期3期 9/32 樽式系	4/24
32	乗附	高崎	碓氷川右岸舌状台地	後期3期	4/14
33	少林山台	高崎	碓氷川右岸扇形傾斜地	後期3期	3
34	雨壺	高崎	井野川左岸台地	後期2期	1
35	並榎山王裏	高崎		樽式系	1
36	荒砥前原	前橋	荒砥川・神沢川間の舌状台地	赤井戸式系	3/7
37	西大室	前橋		樽式系・赤井戸式系	
38	下田中	新田	大間々扇状地端部低台地	古墳前期	8/30
39	間之山	伊勢崎		古墳初期	1
40	多比良	吉井		赤井戸式	5/5
41	中高瀬観音山(1)	富岡	鍋川右岸丘陵比高60m	後期3期	約3割

※発掘見学時のメモによるものあり。

(1)＝「発掘された鍋の谷」所収の調査遺跡一覧による